



被害者の声 「きょうだい犯罪被害に遭うということ」

講演者：御手洗さん（犯罪被害者ご遺族）

2004年6月、長崎県佐世保市で6年生の女子児童が同級生の女儿にカッターナイフで切りつけられ死亡した女子児童殺害事件の被害者のお兄さんです。事件当時、中学3年生で、高校進学後に「保健室登校」になり、事件のことの整理がつかず、先の見えないトンネルが続きました。今年で事件から16年、当時の思いやその後の状況などをインタビュー形式でお話しいただきました。インタビュアーは武庫川女子大学准教授の大岡由佳さん。

●先生たちに囲まれ事件知った

大岡●事件から16年が経ちました。加害女兒は家庭裁判所に送致、児童自立支援施設に入所しましたが、その後、退所しています。あらためて事件を振り返り、感じられることや、今の心や体の状況はいかがでしょう。まず事件を初めて聞いたあたりからお話ください。

御手洗●当時、一緒に暮らしていたのは父親と自分と妹の3人。中学生だった私は、5時限目に突然、担任の先生に「話があるので来てくれ」と言われ、相談室に呼び出されました。部屋には校長先生をはじめ7、8人の先生が待機していた。校長先生からA4の用紙を渡され「まず、これを読んでくれ」と言われました。それはヤフーの記事で、妹が殺されたとはっきり書かれていた。ニュースになっているから事実だと理解はできるのですが、頭に入ってこず、最初に出た言葉が「これをやったのは誰ですか」でした。校長先生は「そういうことは気にしなくていい」と一言だけ。先生方も黙りこくってしまいました。

インタビュアー 大岡由佳さん

大岡●事件後、ご家族と合流された時、お父様の様子やご自身の状況はどうでしたか。

御手洗●父親と合流したのは夕方5時か6時、それまで相談室で待機していました。学校に来た父親の目の焦点が合っていないのです。「あ、これはまずい。今、父親に何かしら刺激を与えると、下手したら父親まで失うかもしれない」。そのように思い、とにかく何を言われても「分かった。大丈夫」と答え安心させようと子どもなりに考えました。

大岡●事件から学校復帰にいたるまでの間、ご家族、周囲の人々はどのような状況でしたか。

御手洗●父親は目がうつろで、心ここにあらずのような状況でした。父親を安心させるという意味でも早く学校に復帰したいと思っていました。当時、家の前が警察署で、マスコミの方がたくさんいて、なかなか外に出ることも難しい。どうしても部屋の中にいる時間が長かった。

●1年経って「きつい」と言えた

大岡●2学期から学校に復帰されますが、中学卒業までの生活やその後の状況についてもお聞かせください。

御手洗●学校復帰に際してカウンセラーとかお医者さんと話すことはなかった。父親を診察した精神科医と話す機会はありましたが、「君はどう？」というような形で聞かれ、父親に心配かけたくないという思いが強く、「大丈夫です」としか言えなかった。学校にはスクールカウンセラーがいたが、アプローチもなく、普通に学校に通い、普通に生活したという感じでした。

大岡●「普通に生活する」というのは並々ならぬことだと思うのですが、勉強や受験はどうだったのですか。

御手洗●逆に勉強することで事件から目を背けていた。成績も上がったが、学校でよく眠りをした。夜なかなか眠れなかった。夢で最初に事件を聞かされた場面が出てくる。そんな状況が続きました。

大岡●高校時代はどうでしたか。

御手洗●父親も仕事に復帰。私も高校に入り、5月になって、父親のことを考える時間が少なくなり、自分自身に目を向ける時間が増えた。そうすると、事件の前の段階のことから考えだし、加害者の女兒を含め妹の友人関係とか、トラブルとかを聞いていたので、それをきちんと父親に伝えていけば、事件は起きなかったのでは、と考え自分を責めるようになりました。

それにとらわれ、うまく体が動かせず、教室に行くことができない。学校には行くのですが、居場所を求めて保健室へ。養護の先生に、事件の話を含め自分がどうしてこういう考えにとらわれたか、とにかくきついと話した。その先生は、「保健室は常に開けておくから、朝から夕方まで居ていい」と言われました。初めて口に出し、居場所を確保できたのは一つ前進だった。

保健室登校が続きましたが、結局、学校から父親に連絡が入り、初めて父親に「きつい」という言葉を出し、自分がどうしたらいいかわからないと話しました。事件からほぼ1年経って、やっと口にできた言葉でした。

大岡●医療機関やカウンセラーとのかかわりについてはどうでしたか。

御手洗●結局、最初に入學した高校は辞め、その後、いくつかの病院を回りました。その際、感じたことですが、

自分の方から一生懸命話をする。でも何か反応がない。一方的に話しているような感覚になって「きつく」なる。自分はどうしたいか、どう思っているのか、より深く掘り下げるには、ほかの人からうまく切り込んでもらって「こういう部分はどう？」というように細かく区切って話をさせてもらうことができたと思います。ただ、病院巡りには父親も一緒だったので、『自分の話を聞いても父親は壊れない。きついということをお親に言ってもいいんだ』という意味では有意義でした。

●クラスメイトが支えになった

大岡●事件の当初、もし民間被害者支援団体がかかわっていたとするならば、どのような支援をしてほしかったか教えてください。

御手洗●あくまでも、うちのケースですが、父親の会社の方が料理とか洗濯、買い物などの支援をしていただきました。学校との調整もマスコミ対応もしていただきました。逆に言えば、そういったことが被害者支援団体に必要なことなのかなと感じています。

大岡●御手洗さんにとって何が支えになったのでしょうか。

御手洗●一番はクラスメイトです。事件から1カ月後、まず友人が遊びに行こうって誘ってくれた。後から聞いた話ですが、友人は「どう接したらいいかわからない」と担任の先生に相談したところ、先生は「深く考える必要はない。事件の前と何も変える必要はない」と言ってくださったようです。『自分が安心して学校に戻っても問題ないんだ』と思えるきっかけにもなった。

大岡●同じ仲間、子どもの支援が非常に大切だと思いましたが、逆に足りていなかったことがあれば、お聞かせください。

御手洗●いくつかあります。まず事件を聞かされた場面を今でも夢に見るぐらいきつい。狭い部屋で先生方に囲まれ、過ごした時間が強く心に残っている。子どもに対してどう事件を伝えるか。自分のように7、8人の先生に囲まれてという状況はよくない。子どもの場合、最終的に学校に戻る。戻る場所がトラウマになってはまずい。

●きょうだい、子どもの支援はちょっと目線を下げて

大岡●次に加害者に関する質問です。加害者の女兒に対して「謝るなら、いつでもおいで」と著書に書かれていますが、その心境をお聞かせください。

御手洗●「謝ったら許してあげる」ということではありません。彼女が謝れる状態にまできちんと更生していると信じているからです。自分にとっては、謝るという行為があって初めて、これ以上、彼女にとられることはなくなるだろう。自分の生活のほうに戻れ、スタートラインに立ちましようという意味を込めての言葉です。

大岡●最後に一言いただいて締めたいと思います。

御手洗●被害者支援にかかわる方々には、ちょっと目線を下げて、ちょっと身長の高い子たちのほうに目を向けてほしい。親だけじゃなく、子どもにも連絡先を渡して「いつでも連絡していいよ」「どんな話でも聞かよ」と一言言ってあげる。もしかして連絡が入り、支援に早く入る可能性もあります。「君も見てるよ」という姿勢を見せてほしい。そういう姿勢で臨めるような環境を整えてほしいと思っています。(講演要旨)